

## ヒトとヒト以外の動物の扱いの質的な違いに関する哲学的議論

伊勢田哲治（名古屋大学情報文化学部）

本発表は、ヒト以外の動物（以下、特に支障がない限り「動物」と略）特に研究に使用される動物に関してどのような配慮がなされるべきなのか、動物の種類ごとに配慮に質的な差を設けるべきなのか、ヒトに対する扱いとの差はどう説明されるのか、などについて哲学者の観点から考察することを目的とする。ここでは特に、こうした問題について考える上で力を発揮すると思われる選好功利主義の考え方を中心に説明していきたい。

### 1 なぜヒト以外の動物について配慮すべきなのか？

なぜヒト以外の動物に対して配慮する必要があるのか。このように問う人に対するもっとも効果的な答えは、われわれがすでに受け入れている道德律がそのように要請するからだというものである。われわれは、自分たちがヒトの個体を「人間」として扱い、道徳的に配慮するのは当然だと考えているだろう。しかし、そこでさかのぼって、「なぜヒトの個体に対して 配慮すべきなのか？」についての理由（道徳的理由）を考えてみよう。答えはいろいろ考えられる。

(a)相手の幸福が大事だから 他の動物の幸福は？

(b)人格は尊重しなくてはいけないから 人格の定義は？人格を持たないヒトの個体は？どう定義してもヒトの赤ん坊よりはチンパンジーの成人の方が「人格」をもつのでは？

(c)各人は配慮してもらおう権利を持つ なぜヒトという種だけに権利を限定？

(d)立派な徳を身につけた人間は当然他人に配慮するものだから 他の動物にも配慮するのが本当に徳を身につけた人間では？

実際的な理由としては「見返りが期待できるから」などもあるだろうが、それは普通は道徳的理由とはみなされないのここでは考えない。また、ヒトという種の構成員であるということ自体をもって配慮の対象となる理由とするならば、人種差別と同様の種差別であるという批判を免れない。「種」という概念自体、共時的には意味があるけれども、通時的に見ると人為性の強い概念である（例えば数百万年前までのすべての類人猿の個体の集合を考えたときに、どの個体までが「人間」であり道徳的配慮に値する存在で、どの個体からそうでないのかという問いにどれくらい意味があるかを考えてみてほしい）。

このように、ヒトの個体に対して配慮する理由のたいていは、少なくとも他の動物の個体のあるものには当てはまる。そうならないように厳しい基準を設けると今度はヒトの個体でも失格するものが出てきてしまう。こうしてみると、現在われわれが受け入れている道德律のどれをとっても、人間だけを配慮の対象とするということを正当化できるものはなさそうである。（しかし、これについては倫理学者の間でさまざまな試みがなされ論争されているところである。）ただし、このような拡張の論理では、本当にラディカルな道徳的考慮の拡張、たとえば生態系そのものを配慮するような立場は出てこない。そのため、環境派からは、こうした拡張の論理は人間中心主義的だと批判されることになる。これについてはまた後でふれる。

実は、上であげた理由は、功利主義、カント主義、権利論、徳理論などのメジャーな道徳理論が挙げる理由でもある。ここでならべたような道徳理論のどれが正しいか、というのは、簡単には答られない問題である。科学理論の場合には、対立する理論の間の選択は原理的には何らかの実験・観察で決着がつくが、倫理学理論では実験や観察はそうした決定力をもたない。ひとつの考え方としては、

- ・われわれの道徳的な行動や直観をどれくらい説明できるか、という説明力
- ・どれだけ統一的な視点を与えられるか、という概念的単純性
- ・困難な道徳的決定の場面や新しい局面における問題処理能力

などを総合的に判断することになる。ただし、このすべてにおいて優れている理論というのはなかなかないし、どの要素にどういう重みをあたえるかはひとによって違う。

功利主義は、概念的な単純性と新しい局面における問題処理能力できわだっている。以下では、功利主義の正しさを仮定することなく、功利主義の観点を使えばどのように動物への配慮の問題が処理できるかを見ていく。

## 2 選好功利主義の枠組み

では、動物に配慮するとして、具体的にどう配慮したらよいのか？この問題を考える上でもっとも役に立つのが功利主義理論。まず、ヒトを対象とした功利主義からみていこう。

功利の原理・・・関係者（その行為の影響をうけるすべてのヒトの個体）の幸福の総和を最大化するよう行為すべし。

さまざまな権利や義務などがなぜ必要なのか、ということをつきつめて考えていくと、われわれは結局「それがみんなの幸福につながるからだ」と答えざるをえないのではないか？逆に、「なぜみんなの幸福を求めなくてはならないのか」という問いに対しては、それ以上答えを与えようがないと感じるのではないか？（というのがベンサム以来用いられてきた功利主義擁護の論法）

しかし幸福とは一体なんなのか？

(a) 快樂功利主義は快と苦の総量で幸福を定義する立場。行為のよしあしは快樂の総量から苦痛の総量を引いたもので決まる。

(b) 選好功利主義では、選好(preference)の強さ、つまりAという選択肢よりBという選択肢の方を望む気持ちの強さを使って幸福を定義する。より強い選好が充足されれば、その人はより幸福であると言える。

現在では、いくつかの理由から選好功利主義の方が主流。

選好はすべてを考慮に入れた上でのその個人の選択と密接にかかわるので、外面的な基準で判断しやすい（いわゆる「快」は、最終的には選択されないこともよくある）

直接快樂と関係しない理想に基づく選好や、高次の選好（選好についての選好）なども考慮にいれることができる。（洗脳をうければ無上の幸福感が味わえると分かっているても、洗脳をうけること自体に反対する選好によってその選好はキャンセルされる）

本人によって経験されない選好充足（たとえば遺言の執行や安楽死に関する事前指示など）も考慮にいれられる可能性がある。（ただしこの可能性によってかえって別の問題が生じることもある）

### 3 選好功利主義の動物への適用

以上のような選好功利主義の枠組みを動物にも拡張するにはいくつか乗り越えなくてはならない問題がある。

他人の選好を知るというのを、「相手の身になって考える」とうけとめると、動物への拡張は非常に難しくなってくる。哲学者の愛用する例はコウモリで、音で地形を把握する能力を持たない人間がはたしてコウモリから見た世界というのを原理的にすら想像できるのか、というのは難しい問題である。「相手の身になる」という感情的なプロセスよりも「相手に関する情報から選好の体系を再構築する」という知的なプロセスの方が求められる。（ただし、道徳的な規範を内面化し、行動にむすびつける上では感情を通じた理解は欠かせない）

ヒト以外の動物の認知的・心理的構造は人間と異なるかもしれないが、選択を行う以上は選好を持つと仮定でき、選択のパターンを分析することで、選好の強度についてもある程度推測できるはずである。ある個体にさまざまな状況下で選択肢AとBを選択させたときに、常に明確にAを選ぶようならばBに対するAの選好は強いと想定されるし、少し条件が変わるだけで選択がひっくりかえるようならば選好はそれほど強くないと想定される。

ある動物の認知能力の分析から、その動物が「死」の概念を持ち得ないことがわかれば、その動物の「死なないこと」への選好は無視してもよい。功利主義的観点から動物解放を論じるシンガーらは動物を殺すこと自体は必ずしも悪くない、ということ認める。

「洗脳に対する反対」のような高次の選好はおそらくヒト以外の動物は持つことはできないので配慮する必要はおそらくない。また、「人格としてではなく単なるものとして扱われる」ことに反対する選好は多くの人を持つと思うが、この選好を持つには道徳的な関係についてのある程度の理解が必要である。

逆に、人間にはない認知能力を持つ動物に関しては、その認知能力と関連した選好を理論的に再構築して補ってやる必要がある。（人間には聞こえない音がある種の動物にとって不快である可能性等）

つまり、さまざまな動物に対する配慮の仕方の質的な差は、個々の動物の認知能力、選好を形成する能力によって正当化される。

大事なのは、同じ強さの選好は、それが人間のものであれ他の動物のものであれ、同じだけの重みを持ってカウントされるということ。ただし、一般にはヒトの方が複雑で多様な選好を持つと考えられることから、ヒトの個体が他の動物の個体にくらべて様々な点で質的に違う配慮をうけることは正当化される。しかし、たとえば動物を使う実験に関しては、ヒト（特に科学者であるヒト）の持つ科学の発展や新しい発見に対する選好と、実験に使われる動物の選好とが同じ平面上で比較されなくてはならない。動物実験に関する規則はそうした考慮に基づいて決めていく必要があるだろう。

また、このような功利主義的思考方は、動物を集合としてではなく個体として配慮する観点を与える。実験につかわれる動物にどの程度個体差があるのかはわたしにはよくわからないし、選択のパターンに個体差がまったくないならば個体としての観点はあまり必要ではなからう。しかし、選好の体系に明確な個体差があるような動物（大型類人

猿は少なくともそうであろう)については、個体差に基づく選好充足ができるならそれにこしたことはない。

このように、選好功利主義は、さまざまな動物(ヒトも含めて)の違いに配慮しながらしかも統一的に扱う視点を提供するが、それでも、ある意味ではまだ人間中心主義的だという批判はまぬがれない。「選好の充足」は、人間にとっては大事かもしれないが、他の生き物にとっても大事なのか? 結局のところ人間にとって非常に都合のよいものさしで測っているだけなのではないか?

#### 4 功利主義の難点

(1) 功利主義の考え方では、場合によっては人間の命よりも動物の命の方を大事にすることになるのでは? たとえば、幸福を感じる能力をほとんどもたない老人一人とイヌ数百頭で比べれば、イヌの命の方が優先されてしまうのでは?

理論的にはありうるが、現実の状況に当てはめて考える限りはほぼそんなことはない(ヒトの個体を動物以下に扱うことの社会的影響など勘案すれば)。この考察を強化するのが批判的レベルと直観的レベルの区別である。

功利の原理を個々の事例に当てはめて考えるのは、時間もかかるし、その時々自分の立場によってバイアスがかかる可能性が高くなる。そこで、事前にある程度一般的なルールを決めておき(批判的レベル)、実際の行為の際にはそうしたルールに無条件に従って行動する(直観的レベル)ことにすれば効率もよく失敗も少ないだろう。

さらにいうと、この考え方によれば、功利の原理は行為の評価の原理であって、直接行為選択に使う原理ではなくなる。たとえば、主観的には愛や同情など非功利的な原理にもとづいて行動している人も、結果として関係者の幸福を増大させているならば、功利主義の観点からその人の行為は正しい行為とみなされうる。

この区別に基づいて考えると、最低限人間の命を尊重しないようなルールが一般則として認められることはまず考えられない。

(2) 本当に選好強度の比較はできるのか? 特に、ヒトと他の動物の選好の強さの比較などできるのか?

理論的難点は常に残る。現実問題としては、選択のパターンの比較によってくらべるしかない。外面的な選択のパターンで比較をする場合、苦痛や不満をより大げさに表現する個体の方が有利になってしまうという問題はある。(世の中が功利主義者ばかりになれば、小さな苦痛をおおげさに表現できる個体の方が有利になり、正直に苦痛を表現する個体が淘汰されて苦痛の表現のエスカレーションが起きるだろうが、とりあえず今のところそういうことを心配する必要はなかろう。)

違う種同士の間での選好強度の比較は今のところ非常に危険であるが、だからといって、人間の選好以外は無視できるとするのも極端。人間にとって大きな負担なく充足してやれる選好があるならば、当然考慮すべきだろう。

(3) 人間にとって、選好充足(=欲望の満足)などより大事なことはいくらでもあるのでは? 権利を尊重することや徳を涵養することは、それ自体で価値のあることなのではないか?

「選好」には理想なども含むので、いわゆる欲望とは分けて考える必要がある。また、「権利」や「徳」に基づく行為でも、功利主義の観点から正当化できる場合がある

ことは上に述べた通り。しかし、選好功利主義でわれわれにとって道徳的に重要な価値がすべてカバーしきれないわけではないのは認めてもよいかもしれない。その場合、理論的単純さを少々犠牲にしても、「権利」や「徳」への考慮を必要に応じて併用する折衷主義の方がわれわれにとってより満足のいく選択肢となるだろう。

(4)動物にとっても選好の満足より大事なことはあるのでは？生態系の維持や絶滅危惧種の保護は功利主義の観点から説明できるのか？

功利主義は、選好能力のある生物の選好充足によって行為の善し悪しを判断するので、選好充足に関係しないものは功利主義の観点からは無視される。

生態系の維持は通常はその生態系の中にある個々の動物にとっても利益となるので、支持される。しかし生態系の維持のためにある種の動物を大量に間引かなくてはならないというようなときには、生態系の破壊による将来の苦痛と間引きによって生じる現在の苦痛を比較する必要がでてくる。また、選好能力を持つと思われる動物がいないような生態系を維持する理由を見つけるのは功利主義の観点からは難しい。

絶滅危惧種の保護についても、功利主義はある個体がどの種に属するかということ自体には価値をおかないので、保護の論理をみつけるのはむずかしい。学術的な利益や、医薬品の製造など、二次的な理由をみつけることはできるが、それだけでは保護の論理として十分ではあるまい。

したがって、生態系そのものの価値や希少種そのものの価値を考慮に入れたければ功利主義とは違う観点をとる必要があるだろう。いわゆるディープエコロジーの主張などがこれにあたる。これも、功利主義とは少し違う観点からの動物への配慮として、念頭に置いておく必要はあるかもしれない。ただ、ディープエコロジーの主張は、すでにその主張を受け入れている人以外に対しては訴える力が弱いように思われる。

#### 選好功利主義に関する邦語文献

R.M. ヘア 『道徳的に考えること』 内井惣七・山内友三郎監訳、勁草書房 1994年

ピーター・シンガー 『実践の倫理[新版]』 山内友三郎訳、塚崎智監訳 昭和堂1999年

奥野満理子 『シジウィックと現代功利主義』 勁草書房 1999年